

國學院大學學術情報リポジトリ

神道の連続と非連続：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, エルマコーワ, リュドミーラ, ブロトンス, アルノー, ランベッリ, ファビオ, エバソール, ゲイリー・L, アントーニ, クラウス, 川村, 邦光, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000504

セッション3

総合討議

◆パネリスト（発題順）

リュドミーラ・エルマコーワ

アルノー・ブロトンス

ファビオ・ランベッリ

ゲイリー・L・エバーソール

クラウス・アントーニ

◆コメンテータ

川村邦光

◆司会

井上順孝



【司会（井上順孝）】最後の「総合討議」に入らせていただきます。非常にいろいろなテーマが出まして、時代的にも広いし、事例的にも多様で、総合コメンテータの川村さんも頭を悩ませていることと思います。冒頭に申しましたように、今回のシンポジウムは、このようなテーマで、一体どこが糸口となるかを見つけていくことがひとつの大きな目標でございます。川村さんにまずコメントをしていただいて応答していただきますが、その後の議論ではなるべくこういうテーマのポイントは何かということを見つけ出す作業に加わっていただければと思います。

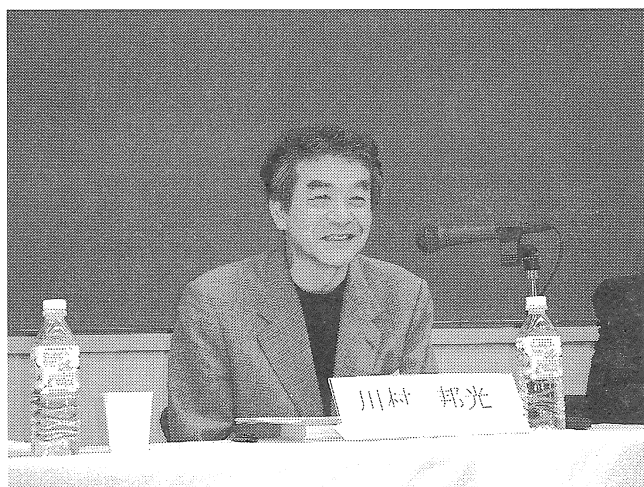
それでは、川村先生、よろしくお願いいたします。

I. コメント

川村邦光

僕の場合は神道を中心に研究してきたわけではありませんで、大雑把な宗教研究、それもほぼ近代以降の宗教研究を若干やってきたという程度ですから、総合コメンテーターなるものの資格としては不十分であると思いますがよろしくお願いいたします。

先日、神社にお参りして来ましたが、そこで神主さんが「自分たちの神社のあれは宗教ではないのだ、神様の信仰なんだ」ということをおっしゃっていました。その神主さん、あるいは一般の国民というか、一般の人々も、自分たちの信仰を「神道」という言葉でとらえているのだろうか。あるいはもう少し言うと、「宗教」という言葉でとらえているのだろうかということが私は以前から疑問に思っているわけです。



「神道」という言葉がどういう概念として登場してきて、どのように使われてきたのだろうかということを経史的にきちんと把握することが必要なのではなからうか。もう一方で宗教という概念も研究されていますが、明治以降に生まれた概念であります。しかし、宗教という概念、先ほどの神主さんもそうですが、例えば、元旦に靖国神社にお参りした小泉首相の場合も「初詣だ」とおっしゃっていましたが、初詣というのは宗教的な行為ではないのか、単なる慣習的なものだろうか。「初詣」にしても、ある種のひとつの祈りみたいな行為があれば、「宗教」という概念の中に含めて構わないのではないか。この場合、幅広く「宗教」というが概念をとらえています。これまで宗教という概念は、キリスト教、また天理教、創価学会、などの新宗教の場合のイメージで「宗教」という概念がとらえられてきた面があるのではなからうかと思われまゝ。

小泉首相の場合も、自分が初詣で靖国神社に行く一なぜ靖国神社なんだというのはありますが一初詣をする。それはそれとしていいと思いますが、それがどういう行為なのかという自覚が欠けていると言えは欠けているのではなからうか。神社の神主さんにしても、「神道」という自覚というものがかなり希薄なのではなからうか。当然のごとく神社の氏子、僕も会津田島の神社の氏子ですが、ほとんど神道という宗教の自覚が全くないわけではなからうか。

そういった意味で、いわゆる日本人の宗教信仰はどういう状況なのだろうか。毎年「宗教年鑑」が発行されています。その中で、神道の信者は日本の人口とほぼオーバーラップするほど多くの信者数があげられています。日本の人口は1億2700万人だと思ひますが、神道の信者は1億6百万人います。一方、仏教の信者は9,600万人ぐらひだと思ひますが、それも日本の人口とほぼ重なり合う。莫大な信者がいるような感じですが、実際にどうなんだろうかと見ると、宗教意識の調査を読売新聞がやっていますが一そこで毎回井上先生がコメントされています一その読売新聞の宗教意識の調査を見てみると、「宗教を信じる」人は2000年では22.8%。そしてオウム真理教事件があつた3年後の1998年は20.5%。その前の1989年は28%ぐらひだつたと思ひますが、オウム真理教事件との絡みでかなりのポイントが減つています。そして、またやや復活してきています。2000年は22.8%、2001年は21.5%で、再び減つています。一方では、神道の信者、あるいは仏教の信者は全人口と重なり合うぐらひにいらしい、そういう調査というは何なんだろうかと思ひます。

そんな中で、読売新聞の宗教意識の調査を見てわかるように、宗教という概念に対するある意味での拒否感まではいかなくても無関心さというものがかなりあるのではなからうかと思ひまゝ。もう一方でまた、同じように神道という概念に対してもあるのではなからうか。例えば、僕は初詣に子供の時代から行つたことがありますが、初詣に行く人は若者の間でもかなり増えています。いつも明治神宮がトップだと思ひますが、それは神道なんだろうか。初詣、あるいは七五三でもいいし、あるいはお祭りに参加する。僕もお祭りが好きで結構お祭りには参加しますが、そういうことを神道という概念でとらえていいのだろうか、とらえることができるのだろうかと考える。いわば、初詣を行っている人、あるいはお祭りの担い手たちというのは、自分たちの行為を宗教として理解しているのだらうか。

うか。また、神道として理解しているのだろうかというのが問われる。そうすると、神道という概念は何なんだろう、ということが出てくるのではなかろうかなと思います。そういった場合、歴史的な概念、あるいは学術用語としての神道概念でいいのだろうか。もう一方では、当然、神道の信者さんがいる。いま現在、神道という概念は狭くなっているのではないのかという気がしています。

最近に使われていませんが、これまで用語として「神祇信仰」という言葉が使われた時代があったと思います。僕の場合かなり大雑把ですが、明治以降は神道、それ以前は神祇信仰という形でとらえたり、神祇信仰という言葉を用いたりしたこともあったわけです。まあ「神道」という言葉が、例えば高取正男さんの『神道の成立』という本だったと思いますが、神道という概念、あるいは神信仰と言ってもいいですが、そういう概念が出てくるときはどういう状況だろうか。神道という概念が必要とされるとき、この趣旨にも書かれています、神道という概念が必要とされたときというのはいつなんだろう。どういう社会的あるいは政治的な状況があるのだろうか。そういう絡みの中で、神道という概念を検討してみる必要があるのではなかろうかなと思っています。

僕の場合は単純ですから、明治以降からとらえてみれば一番わかりやすいのではなかろうかなと。江戸時代において吉田神道もあるし、あるいは民間の中での神道の講釈師、僕が若干知っているのは増穂残口という人です。岩波の思想体系の中に『艷道通鑑』なんていうものがおさめられていますが、増穂残口の場合の神道というのはどういうものだろうか。それは当然のごとく、本居宣長であるとか平田篤胤とかの国学的なものとはかなり違っている。かなり民間レベルの中での信仰、神信仰といったらいいか、そういうものを対象にして増穂残口なんかは「神様の道というのは男と女の道だ」みたいな、そういうことを説いていて、すごくおもしろいなと思って読んだことはあります。そういった民間レベルの信仰、それが神道なる概念とかけ離れているところがかなりあるのではなかろうかなと思います。

今回の発表でも、日本の思想史の中での神道思想、そういう発表もかなり多かったような感じですが、そういった民間レベルでのいわゆる神信仰、あるいは神祇信仰と言えいいか、それと、神道という概念をどういうふうにしり合わせて重ね合わせることができるのだろうかということがひとつあるのでなかろうかなと思っています。その中で、「神道の連続と非連続」という問題も考えることができるのではないかなと思っています。

神道という概念は、ある意味で制度的な側面というのは必ずあると思われます。とりわけ明治以降だと思われますが、それと同時に民間レベルの信仰というか、神信仰というものがどういうふうな形でとらえることができるのかというところが連続性、非連続性をとらえる上でも重要なポイントになるのではないのか。それがまた、先ほど中世における神道、その中で仏教との関係、いわゆる神仏習合的な状況の中で神道というのは自立したのだろうかという問題も出てくるのではないかな。自立してなくて従属していたのだといった場合、非連続性みたいな面も出てくるだろうし、あるいは、ずっと連続性を持っていたけれども、ひとつの発展段階の一局面として神仏習合的な状況というものがあるという形で

とらえることができるかもしれないと思います。

そういった歴史の流れといったらいいのか、とりわけ仏教、あるいは儒教との絡み合いの中での神道あるいは神祇信仰の発展、そういう中で連続性も当然のごとく「連続性」という言葉でとらえることができる面も出てくるのだろうと考えております。

問題になるのは明治以降なのかな、これは僕の場合の関心からで、僕の場合はそんなに古典的なものを読む力がないということもありまして、中世の神道史をほとんど読んだことがないという不勉強です。そういう中で僕が関心を持てるというか、若干研究したかなと思われるのはせいぜい靖国神社くらいです。明治以降の神道、それはこれまでの近代以前といったらいいのか、かなり違った側面を持っているだろうなという気がします。とりわけ、明治元年（慶応4年）に祭政一致の制度に戻っていくのだということで太政官布告が出されていく。その中で、いろいろな形で祭政一致なる制度を模索していく。その過程でかなりの部分は崩壊していったのではないかな。だから、いわゆる国家神道なるものもそれほど簡単にはつくり上げられなかったのではなかろうか。

国家神道なるものはいつできたのかというのはいろいろ議論があると思いますが、明治の初めから国家神道ができたのだという言い方は乱暴だろうと思います。いろいろな形で試行錯誤されていく。その中で、明治4年（1871年）に伊勢神宮との絡み合いで神社というものは国家の宗祀なんだという形で、明治政府が宗教というカテゴリーの中から神社神道を切り放していく。もう一方では、いわゆる教派神道という形で宗教の中での神道というものをつくり上げていく。そういう中で、神道というものがある意味で2つの面、2つの種類に分けられていく。一方は宗教、もう一方は非宗教なるもの。いろいろな議論があると思いますが、そういう中で神道なるものも国家の宗祀という形で政治的につくり上げられていく。この中に神道家、神職の人たちも、制限されつつ宗教活動をしていった。そういう歴史的な流れがある。でも、神道家の人たち、あるいは研究者の中でも、いわゆる国家の宗祀である神社神道と一応呼びますが、それを宗教的なものとして全く考えていなかったかというとなんなことはなかったんですね。宗教学者の加藤玄智は、「国家的神道」という言葉を使って国家の宗祀とされた神社神道をあらわしている。あるいは折口信夫なんかも宗教的な側面を出して行ったと思われます。そういった中で、日本の明治期以降、国家の宗祀である神社神道にそんなに頼っていたのだろうか。それほど重視していたのだろうかというのが、これまで、ここにいらっしゃる新田先生とか、阪本是丸先生辺りを読んでもみると、国家というか明治政府もそれほど神社神道を重視していたのだろうかということかなり疑問だなという感じがしないわけでもない。いわゆる伊勢神宮、神宮だけは当然のごとく重視していましたが、いろいろな神社政策の流れを見てみると、それほど神社神道を重視しているとは思われないという気がしました。

また、明治22年（1889年）に明治憲法ができますが、その枢密院での憲法の審議の中で伊藤博文が「我が国では、宗教なるものの力は微弱だ」と言うわけです。そして、「国家の基軸として何かあるのだろうか。仏教は、かつては栄えていたけれどもいま現在では衰退している。いわゆる神道は宗教として人心をとらえる力が乏しい」という。このとき、

伊藤博文は神道を「宗教」という言葉でとらえていますが、神道は人心をとらえる力が乏しい。何があるのかというと、皇室だけだ、天皇だというわけです。これまでも、この議論の中で天皇という言葉はどういうふうに神道の中で関連づけてとらえることができるかという議論がありました。伊藤博文の場合は、神道と天皇・皇室というものを明確に分けている。そして、天皇・皇室のほうに、いわば国民を吸収する、あるいは人心を掌握する力があるのだということを認めていた。明治 22 年ごろは、よく言われるように天皇あるいはミカドと言ってもいいし、天子と言ってもいいと思いますが、ほとんど知られていなかったと言われています。その中で、伊藤博文なんかは、自分たちが皇室・天皇、明治天皇でもいいですが、それらをつくってきたという自信のあらわれなのかなという気がしないうわけでもありません。そういった形で、いわゆる神道と天皇・皇室、それを明確に区分していた。かなりの先見の明があつて、さすがができる人物だなと伊藤博文を思ってしまう。そういった形で、政府自身もそれほど神道をそんなに重要な宗教的なもの、あるいは国家の宗祀という形で保護していた面もありますが、神道というものは管理されていたのではなかろうかととらえることができるのではないかなと思います。

そんなところで、最後の総括討論になるとと思いますが、共有できるテーマとして非連続性にとらえる上で皆さんにお聞きしたいと思います。ひとつは、神道という概念をどういうふうな形で用いていったらいいのだろうかということで、先ほどの中世の中での神道というものをどういうふうにとらえていくのかという形の議論。

もうひとつ、ランベッリさんが神道で天皇はそんなに重要なのかというすばらしい、というか衝撃的な発言をされたと思います。いわゆる、神道の中で天皇をどういうふうに位置づけて解釈し、ある意味で利用というのはあれですが、用いようとしてきたのだろうか。それとの絡みで、皆さん 5 人の発表の中である程度共通しているのは、『古事記』、『日本書紀』をどう位置づけるか。それぞれのある時期、例えば、熊野でもいいし、中世の神道でもいいし、あるいは近代の神道でもいいのですが、『古事記』、『日本書紀』を聖典として依拠し、どのように位置づけて、どのように新たな解釈を加えたのだろうか。また、どのように用いていったのだろうか。ある種の特徴みたいなものがあつたら、教えていただきたいなと思っています。

こんなところで、コメントは一応終わりにしたいと思います。

Ⅱ. 応答

【司会】ありがとうございました。発題の中で欠けていた「現代から見てどうか」ということを補足していただいた上で、それを反映させる形で歴史的な問題をどう考えるかという投げかけだったと思います。つまり現代においても神道、習俗、あるいは信心みたいなものは曖昧にとらえられるわけですが、特に神社に行く行為、あるいは神社そのものが神道としてとらえられていない場合が多い。こういうことから始まりまして、ではそれぞれの時代に、一体神道なるものがどういうことになるのか、そこから神道の概念が各発題者によって、どうとらえられているかということだと思います。これは定義と言ってしまくと堅苦しくなるので、自分の問題設定のパースペクティブ、どのようなところから神道というものを見ようとしたかという形でお答えいただければと思います。それから、先ほどのことを受けて「中世の評価」ということ。これは非常に重要なことになりますからご意見があればお願いしたい。その中でも天皇の問題、天皇と神道というものをどう見るかということについてもご意見があれば付け加えていただきたい。それから、『古事記』『日本書紀』の位置づけと申しましょうか、当然この問題は神道というものをどういうパースペクティブから見ていくのかということと絡まってくるとおもいますが、その点についてもお願いします。すべてにお答えいただかなくても結構ですので、お一人ずついまのコメントに関連づけてもう少し付け加えたいことがあれば言うていただく形にしたいと思います。では、発題順ということで、エルマコーワ先生からお願いいたします。



【エルマコーワ】私の昨日の発表のテーマは、和歌の起源や歌の特徴に関わっていましたが、今日の話はもっと理論的なレベルになりましたので、そのことに関して、私の専門よりも広い範囲ですけれども、付け加えさせていただきたい点があります。

今日大変面白い発表を聞かせていただいて思ったのは、『古事記』、『日本書紀』と、中世の理論、それも宗教学的指向、救済の課題を解決しようとする哲学的な問題などが出てくるわけです。ある意味で、この間は何も書いていない空白がある感じですが、それに関わって考えたことがあります。レトリックのレベルになるのですが、この神国という概念はわかっている限りでは『後漢書』にはじめて出てきます。その前に例えば天皇は中心というよりも普通の人間ではないということを、『古事記』、『日本書紀』は神聖な歴史として出てきます。しかし、宣言として歴史のバトスとしてこのことを発表する文章は、『続日本紀』の宣命です。その宣命の中に「神ながら神ながら」という場面があり、「大和国」という言葉が出ています。これは本当に政治的な宣言になります。時代的には、それはちょうど中世の前の段階に当たると思います。それから近世のことになりますが、普通、歴史的な文章はどこでもいつでも書く必要があるものと書く必要がないものが、書く人の意識の中にあります。その場合、皆が知っていることなら書かなくてもいいので、外から見ると、皆が常識と思うことでも初めて見るからびっくりします。ですからこのことを書きます。例えば、ヨーロッパ人であるケンペルやシーボルトの旅行記を見ると、私たちが全く宗教とは思わない社会のグループが宗教の持ち主になるわけです。

例えば、シーボルトが書いているもうひとつの日本の宗教は「座」。これも、宗教の種類とされています。こうしたことはもうひとつの観察点になるのではないかと思います。こういう観察点も考慮に入れて何か新しい面が見えるようにならないかと考えました。

【司会】ありがとうございました。これは最初に川村さんがコメントされたように、神社に行っても、それは宗教をやっているとは思わないが、外国人から見れば直ちに宗教に見えるという議論と重なるご指摘であったかと思います。

次にプロトンスさん、お願いいたします。

【プロトンス】昨日、熊野に関する発表をしました。発表では、当時、12世紀辺りに神社があつて寺院がある、それで山がある。そういうふうに分類しました。結局、寺院と言えばはっきりと仏教と言えます。神社があるという、まだそこには疑問がある。山があるんだったら、それは吉野と金峰山、熊野のことを指します。この場合は、修験道と関わりが深いところです。これらがどのようにそのときの宗教的な状況の中で位置づけられるのかはちょっと難しい問題です。

一応、こういう3つに分かれて信仰の問題が出てくると思います。信仰というと、神を崇拝するとか、信じるということがある程度言えます。そこで当時の12世紀末期つまり平安後期から鎌倉期に入って、信仰と神道とのつながりはどこにあるのかを考えてみました。一応、黒田俊雄先生が仮説を立てたときに「神道というのは仏教の中に存在しているもの、仏教に対してあるもの」と主張しています。しかし、昨日取り挙げた資料、『長寛勘文』を読むと、もちろん「神道」とか「信仰」という言葉は全然出てこない。しかし、熊野の神

はどの神であるのか。それを解決するために当時の学者は皆記紀神話ばかりを取り上げている。なぜ、ローカルな神を記紀神話と結びつける必要があったのか。その背景には、熊野の神は伊勢の神とひとつの神であるのかどうかという問題がひとつあった。

ということで、皇室神話に基づいている、皇室のための神話というものは重要であるとはっきり言えますが、記紀神話に関する宗教的な行為というものは、それが神道とは言えないのでしょうか。結局、皇室や朝廷にかぎって神道というものがあって、その神道というのは神話に基づいていたというように考えた。地方だったら、それはまた信仰のレベルに達する。信仰のレベルまでに達したところ、有力な神社はあくまでも神道と結びつけるように努力することはしませんでした。結局、信仰のレベルでも十分でした。神道になる天皇と、記紀神話と結びつける必要がなかったわけです。

信仰のレベルでは仏教は非常に影響が強くて、多分、天皇が中心であるとすれば、そのシステムの中に天皇自身の存在はもともと仏教とは全然関わりがない。そういう関わりが深くなるのは後のこと。この段階では関わりがない。神道的な要素、神道的な神話に基づいて存在している人物。そういう意味で、仏教はかなり努力して天皇そのものを正当化するようにいろいろな説をつくり出した。特に、「王法仏法相依論」は仏教の立場です。結局、天皇中心の人物だったら私にとって神道的な人物で、神道というものは全くローカルなものです。地方はもっと信仰的で何かの神に対して、人間の個人的なものとか組織がある。それははっきり言えないが、システムとしては神道がある。神道の中に仏教の要素はまだなくて、鎌倉に入ったら出てくる。そして、地方のほうが信仰のレベルは逆に仏教の影響は非常に強いと言える。そういうふうに、私は整理いたします。



【司会】ありがとうございました。今の意見には反対もあるかと思いますが、後で議論をしたいと思います。では次に、ランベッリさんお願いいたします。

【ランベッリ】川村先生が投げかけた3つの質問に対してお答えしたいと思います。

まず神道という概念をどうとらえるべきかということですが、もちろん私から見てこれは難しい質問だと思います。例えば、イメージを使ってみると、神道というものは堅い中核のようなものではなくて、ネットワークのようなものとして考えてみたらどうかとイメージしてみました。つまり、ずっと何かが残って世代から世代に伝わるようなものではなくて、様々なアイデアや概念や実践、習慣、制度、組織の流動的なネットワークとして考えてみたらどうでしょうか。

ひとつ、もちろん神道と言えば明らかに地域信仰と深い係わりがあることは否定できません。日本の地域信仰。地域信仰と言えば、もちろん地域によって信仰が違うかもしれませんが、社会グループだとか階級だとかによってまた様々な信仰のあり方があるでしょう。日本の場合は、歴史の早い段階から仏教というかなり膨大なものが入ってきたということで、仏教が他の仏教国と同じように地域信仰を整理したわけです。その仏教的な地域信仰の整理の結果として、いま神道の「種」が現れてきたのではないかなと思います。これもまた比較してみると、例えば、タイとかミャンマーだとか、仏教と地域信仰との深い関わりがありますが、あそこの近代の歴史の発展は日本とは違って、国学のような運動がなかったようです。あるいは、あったとしてもその地域信仰を中心とした国家アイデンティティをつくらなかったわけです。

ですから、いまこのように神道の話ができるのはまさに国学があったからかもしれません。ですから、これも日本の、これはまさに日本の独特な状況かもしれません。だから、神道があるというのではなくて、国学があったということが、いま我々が持っている神道という概念の構築に非常に影響があったかもしれません。

そうすると、もちろん国学における地域信仰の整理の仕方もあるし、儒学的な整理の仕方もあるし、仏教的な整理の仕方もあるし、そうではない整理の仕方もあるかもしれません。それらは、神道といえば神道ですが、それぞれ違う。あるいは、似ているのではないかというとらえ方があるのではないかなと思います。

天皇の場合は、先ほど挑発的にああいうことを言ってみましたが、例えばヨーロッパの中世の歴史研究を見てみると、一般庶民の歴史を見ると国王という存在はほとんどありません。つまり、一般の庶民・百姓のレベルでは、王あるいは王制というものはほとんど影響がなかったような気がします。ですから、同じような歴史観、あるいは歴史学は、十分日本にも可能だと思いますが、これは新しいことではなくて網野善彦先生はずっとこのようなことをやってきたわけです。ですから、直接天皇家と係わりを持った人々や社会的なグループや地域があったけれども、そうではないいろいろな人々もいたでしょう。ですから、このような天皇抜きの歴史とか、天皇抜きの神道の歴史が考えられるのではないかなと私の中で半分挑発的に考えてみたいと思います。

こういう話をするとう失礼かもしれませんが、悪意を込めて申し上げているわけではあり

ません。だから、逆に近代以前の時代や地域にあわせた歴史学が必要だと思います。『古事記』や『日本書紀』の位置づけについて、『麗気記』を見れば『古事記』の影響は全くありません。普通、中世のお坊さんたちが読んでいたのは『日本書紀』です。あるいは『日本書紀』にあると思っていた話がたくさん出てくる文献です。といっても、それらは実際には『日本書紀』には入っていないですが、どこかから聞いた話だと思います。そのような「中世日本紀」と言われている幻想的なテキストをだんだん膨らませていくようなことがあります。それだけ『日本書紀』というものがひとつの憧れの対象だったり、知的な刺激を与えるようなテキストだったと思います。その理由は先ほど申し上げましたが、まず日本人でいることを意識し始めていたかもしれないし、仏教の特に蒙古襲来の後、あるいはまた仏教のシステムの限界を意識して違うところでその限界を解決し、乗り越えようとしていたのではないかなということで、こういうような文献に興味を持ち始めていたのかもしれません。

もうひとつは、ただ文化的な資本だとか、象徴的な資本だとか、ずっと貴族の中でしか伝わらなかったものを手に入れることによって、ある程度の文化的な資本が得られるのではないかという現象もあったかもしれません。特に室町時代後期になると、ある程度こういう現象も見られると思います。とりあえず、以上です。

【司会】ありがとうございます。いろいろなこととお答えいただきましたが、国学があったから神道概念ができたということは、神道の連続、非連続を考えたときのもう一つのポイントですね。中世と近代における連続と非連続が議題になります。

では、エバーソール先生お願いいたします。

【エバーソール】私が発表でとりあげたのは、アメリカで英語で書かれた神道研究に関する本3～4冊です。黒田先生の研究が発表された後、1980年代から神道研究が急に変わりました。それは、とてもいいことだと思います。いまからもっともっと変わります。ある意味で神道についての知識は、学ぶ場所の影響を受けます。例えば、アメリカの大学の中で、神道を勉強するというと、department of religion になる。神道学のポストは、多分アメリカ中にひとつしかないと思います。グラパール先生が入ったポストはそこです。ポストが空くと、神道のポストではなくて日本宗教のポストになります。だから、神道を勉強する、教える方法は神道に限ってではなくて日本の宗教全体の中でということになります。

もうひとつの大事なポイントは、いまでも「日本の宗教」の翻訳はほとんど Japanese religion です。religions ではない。一般のアメリカ人のイメージでは、日本人はお寺にも行くし、神社にも行く。クリスチャンならさらに教会にも行く。アメリカ人とかヨーロッパ人のように宗教がひとつだけではないから、合わせて Japanese religion というレッテルをつけています。

いまの研究の中で多くなっている方法は、例えばグラパール先生が言われたように場所、たとえば春日などの場所の歴史を勉強する方法がひとつです。もうひとつは、先に聞いたような神道というのは何かということ。ネットワークとか、ストラクチュアとか、システ

ムというような言葉が出てきます。神社神道、そういうようなものへのフォーカスになります。これももちろん、大事な研究ですが、でももうひとつの神道研究も現れてほしいです。多分、僕のようにシカゴ大学の Religionswissenschaft からとなると、神道研究、一般の研究を読むと、その仕事には人間がほとんどいない。神道はこうであるとか、儀礼であるとかいろいろだけど、人間が宗教的な宇宙をつくって宇宙に住んでいることはあまり描かれていません。

僕は、そのような研究のためにどのようにすればいいのかを考えなければなりませんが、さっき言ったようにひとつの方法としてマイクロヒストリーがあります。一人の生活の中で神様とどんな関係があるのか。例えば、中山みきが生きている間の神との関係のことはすごくおもしろいけどあまり描かれてないわけです。出口なおの宗教的な宇宙とか、もっとおもしろいのは出口王仁三郎のような澄んだ世界。彼らの世界の中に神はしょっちゅう来て、体を借りて話をします。そのようなものも、神道という言葉を使いたいのだったらそこが神道のひとつの目立つところだと思います。

また男性の神道と女性の神道は同じですか？それも聞きたいと思います。僕は比較宗教を勉強しますから。他の宗教を見ると全部違います。では神道は例外でしょうか？そうは思えませんが、あまり女性の宗教的宇宙の研究はされていません。これからですね。

【司会】どうもありがとうございました。新しい研究分野の開拓の必要性も指摘していただきました。最後に、アントーニさんをお願いいたします。

【アントーニ】私は今、自分の発表が終わったばかりなので、短くお答えします。川村先生の質問は、神道は宗教ではないか？ということでした。それはわたしにとってもっとも面白い質問でした。もちろん、神道は宗教だと思います。けれども宗教とはなにか？それは大きな問題になります。たとえばケンペルの『日本の歴史』の第3巻には日本の宗教についてのものすごくおもしろい記録があります。それによると、日本の国には宗教が4つあります。それは、仏教、儒教、神道とキリスト教です。その頃すでに禁教政策によりキリスト教はなくなっていましたので、その時点では日本に3つの宗教があったことになります。元禄時代、1680年代に書かれたその記録は、大変面白いです。その後ケンペルは3つの宗教についてはっきり説明し、神社と寺の中の諸問題について書いています。「本地垂迹説」について書いてもあります。本当に大変におもしろいですね。たくさん間違いもあって、例えば、天照大神が男性の神だったり。けれども、17世紀末で神道が宗教だったことは、彼にとってまったく問題ありませんでした。

宗教というのは、いつも信じるということが必要です。例えば、ドイツの歴史を見ればイタリアとはちょっと違います。イタリアでは国王の影響はなかった、でもその点でドイツは大変違ってきます。17世紀に戦争の後で、南ドイツはカトリックになりました。北ドイツはプロテスタント、しかし南ドイツの地方にもプロテスタントの村もある。それはどうしてでしょうか、プロテスタントの人は自分で信仰のためにプロテスタントになりましたか。もちろん、違います。昔の小さな王国の王様や、地方の君主は、自分でプロテスタントになりました。王様がプロテスタントになったために人民は皆プロテスタントになり

ました。人々はプロテスタントの信仰とは全然関係なくて、それは政治的なことだけでした。その後も、もちろん人々は自分はカトリックだ、自分はプロテスタントだと思っています。けれども、最初は政治的な決断でした。その後に、その地方の宗教が出てきました。

例えば、私の住んでいる街テュービンゲンはプロテスタントです。その隣町はカトリックです。その二つの街の間は4キロです。なぜでしょう。それは昔、そこがオーストリアの地域だったからです。オーストリアはカトリックでした。そのためにその町は今にいたるまでカトリックです。テュービンゲンが属していた王国はそのときプロテスタントだったので、いまでもプロテスタントです。そのたとえでいえば、宗教と政治の関係はどこにでもあると考えられます。

以上の見方からすると、宗教はつくられたものです。いろいろな理由で作られたもの。それは支配の正当化の考えです。例えば、日本でも天皇の問題だけではなく地方でもそうです。例えば、出雲地方では律令時代から国造がいるそうです。出雲国造の正当化は神話的なにおいがします。出雲国造は昔も、江戸時代もそうだったと思いますが、とにかく政治的な神話からできました。そのことは大変おもしろいと思います。私は比較民族学か社会文化学の立場です。その立場からすると、日本の諸宗教制度と他の国、とくに、中国か南アジアのいろいろなところの制度と比べるのは大変おもしろいと思います。それは、神道学のためにいいことですが、世界の宗教学のためにも、日本の例は必要でしょう。エバーソール先生は *Religionswissenschaft* という立場ですが、いつも同じテーマでヨーロッパからインドまで使われるテーマですが、日本だったらもちろん仏教か禅が使われます。けれども、神道はあまり例がない。まだあまりわからない。

また神道と政治的な制度は日本ではものすごくおもしろいと思います。日本の例、宗教の例から、他の地域の問題もよくわかると思います。そのためには、比較的な神道学は外国にも日本の研究のためにもいいものだと思います。

【司会】ありがとうございました。宗教を信じるという要素が必要かという、これまた大変な問題もありまして、宗教というものをどうとらえるかという大きな問題も生まれております。今日は残り時間もあまりありませんから、議論をフロアに開きたいと思います。エバーソールさんのジェンダーの問題は私も虚を突かれた気がします。連続、非連続というどうして時間軸で考えてしまいますが、ジェンダー的な連続と非連続という方向へも展開する視点は面白いと思いました。

Ⅲ. 自由討議

【司会】これからはフリーな討論にしたいと思います。

【小林達雄（国学院大学）】私は縄文時代のことについて研究している者ですが、神道あるいはそれが中核をなすような日本文化のことについての歴史だとか、起源だとか、それが基層文化としてどういう意味を持つのかということについて興味を持って皆さんの話をお伺いしました。私なりにどういうふうにそれを受け止め、どう理解しようとしているのかということをお願いしながら、それを聞きたいと思います。

最初に、総合コメンテーターとしての川村先生が、神社に寄ったら神主ともあろう者が宗教を自覚していないということについてお話しされましたが、なるほどというふうに実は思えるわけです。当然、そういうことがあってもおかしくないということで、ひとつの真実を表しているのだと思います。

ところで、私は宗教がどうかということについては、私はこういう宗教に属しているという主張ができれば、それが宗教なのではないかと考えます。ところが、私が最初にアメリカに行ったときには、昔のお話ですが、皮膚の色までチェックさせられました。それから、宗教は何かというところに欄がありまして記入しなければいけない、そういう時代でした。

そのとき私は宗教のことをどう書いていいかわからなくて、いろいろな人に聞いてみたら、ブディストと書けばいいのだと。私はブディストという自覚はなかったのに書かなくてはいけません。そういうことから、少なくとも、私は「ここに心の拠点を置いている」ということが主張できなければいけない。



先生がおっしゃった、祈りさえあれば宗教と見做していいのではないかというような考えもあるということについては、一部そういうこともあるかと思いますが、それだけでは足りない。そういうことがあって、それを政治に利用しようとか、行政の中に生かそうということは二次的、ときにはそういうことが起こってくるのではないかと思います。

それから神道をどうとらえるかということと、連続、非連続ということについて意見を述べたいと思います。

ランベッリ先生が、「神道という言葉が残っているからそれが昔からあったんだということにはならないというのは確かだ」というお話があったと思います。少なくとも、我々がここで神道という言葉を使いながらひとつの場で討議しているということは、何か知らないけれども存在しているものがある。それについて、神道という名前を付けてみたということでもとりあえずいいのではないか。とにかく、存在しているから名前が付いた。しからば、神道とは何かというと神道の中には様々な要素がある。その要素には今日のお話にあった国体ということ、政治目的だとか、神社だとか、『古事記』『日本書紀』だとか、さらにシステムだとか、ネットワークだとかいろいろありました。神話というのもありました。

そういういろいろな要素をどう編集して、それをどう抽出して構成して、それを神道と言うかというのはそれぞれの研究者の立場にあるのではないかと思います。一方、それとは別に神道とはどういう要素の組み合わせであるかというようなことは、時代とか、社会とか、政治とか、経済とかということにも左右される。それから、先ほどのエバーソール先生のどこで学んだかというような立場。これには一方、日本人の目、外国人の目、それから、この点はあまり議論されていなかったと思いますが、エバーソール先生がおっしゃったけれども、コモンピープルの人たちにとっての神道というものがある。そういう枠組みの中で、要素をどう取り上げるか。それから、その組み合わせがどうか。そしてその意味するところがどうかということを見極めていくと、時代によっても地域によっても連続性、非連続性がある。また、ちょっと見方を変えれば普遍性なり、特殊性があるということを見極めていくのではないかと思います。

それから、特に連続性・非連続性という問題を見たときに、神道にはこれまでずっとここで討議されてきた相当上位のレベルの抽象的な話。学問としての神道を扱えば扱うほど、抽象的なレベルをさらに高めていくのだらうと思います。それに対して、先ほどのマイクロヒストリーという提言をなさいましたが、一方では具体的にやる。そういう具体的にやるものと、ハイレベルの抽象的な次元の神道というものの区別をする必要がある。ハイレベルの研究あるいは観念というのは非常に抽象的ですから形があやふやであるといいたしましょうか、不安定である。だから、非連続的なことが歴史上起こってくるのではないか。あるときは天皇と結びつき、あるときは国体と結びつき、あるときは『古事記』と強く結びつく。そういうものが出てくるのではないかと思います。

それに対して、町民レベルの一般の人たちの神道というのはずっと変わっていない。岐阜県の祭が過去25年ぐらいで相当内容が変わっているという話がありましたが、それは祭

の形が変わっているのであって、祭を維持しているということについては変わっていない。そういうよりどころを持っているという意味で、連続、非連続が起こり得る可能性というものは上位レベルと下位レベルで違っているというようなことであります。

【司会】ランベッリさん、問いかけられた面がありますので、お願いします。

【ランベッリ】いろいろな見方があるのが当然だと思います。私の場合は個人的な趣味といいですか、連続性、つまり、同一性を重視するよりも、これは個人的に差異性を重視したほうがいろいろなことがわかるのではないかと。逆に、同一性、つまりずっと変わらないものを求めることによって還元主義に陥るおそれもあるのではないかと思います、いろいろな考え方があるのは当然であり、健全なことだと思います。

【司会】エバーソールさんに、ミクロな研究ということで、わたしもあわせて質問したいと思います。現代はミクロな研究はできますが、過去の神道の展開におけるパーソナルヒストリーということはどうやれば可能とお考えですか。

【エバーソール】それに答える前にひとこと言っておきたいのは、マイクロヒストリーとマクロヒストリーと両方が必要です。なぜかというと、村だけ、小さなローカルのことを研究するとあまり変わりませんが、長く見ると変わっています。その村のほうの宗教生活を見て、もっと幅広く違う村、江戸、京都にあるのを広く見ると、その違いがあるのがわかると思います。でも、村の生活を見ていないとその違いがわかりません。

【司会】個人が大事だとおっしゃいましたね。それを、具体的に手段として……。

【エバーソール】もちろん、書かれたものはハイレベルの人が書いているから、そっこのほうの証拠が比較的に多いです。ただ、ときどきその中に一般の人の生活とか声が聞こえる。というのは、昨日、『梁塵秘抄』について、熊野に関連してお話がありました。あれを編纂した人は一番ハイレベルな人です、後白河法皇ですから。でも、作った歌、彼に習った人たちは一番低いレベルの人たちです。

その歌をパフォーマンスではなく学者として読むときは、ある意味で彼らの生活とか、宗教的宇宙もわかると思います。もっと過去にいくほど難しくなります。ただ徳川時代とか、明治期になると十分な資料があると思います。

いままで、例えば、西洋に発表してあるのは Emily Ooms という人の出口なおについてのほんの小さな本1冊だけです。そのような個人の宗教生活についての研究をすれば、神道は何であるかという問題は、また違う方向へいくと思います。いままでの話は日本人の心からですが、日本人は一般的であるかのように描かれると思います。出口なおとか、中山みきのような人たちは、伊勢神宮の宗教の敵のようなところもあるし、そこはすごくおもしろいと思います。伊勢神宮のように力のある既存の制度宗教があって、その一方で中山みきみたいな人が神と直接会って勇気が出たことは大きなことだと思います。だから、まだやってないけれども、そのような神道研究もほしいですね。

【司会】他にございますか。

【小野】ランベッリ先生にお尋ねしたいと思いますが、先ほどの小林先生の問題と重なるかもしれませんが、神道の連続、非連続という問題だけではなくて、日本の思想史をみて

いく上で、先生は日本における異端の問題をどんなふうに見通しをお持ちなのか。答えていただけたらと思います。

なぜこんな問いかけをするかといいますと、例えば、『麗気記』に取り上げられたようなひとつの理論とか、あるいは論理的な枠組み、そういったものが、マイクロヒストリーという言葉を使わせてもらえば、民衆的なところで受容されていくなれば、これは恐らく異端的に受容されていくのではないかと思うわけです。例を挙げると言われれば、鎌倉時代の例を出しますが、それは省略させていただきます。

【ランベッリ】異端の問題は、連続と非連続よりも同一性と差異性との関係があります。同一性、各時代、各グループが内と外を決めることによって、もちろん外は皆異端者ではなくて関係のありそうなものとか、友情関係ができるグループとかありますが、異端者の問題になると特に近世、特に仏教の宗派が制度的に結成されることによって様々な各宗派、異端的な思想として指摘するいろいろなものが出てきます。だけど、異端的といっても、ある視点から異端的と思われたものが多くて、逆に一般的にああいう思想、あるいはああいう行動を行っている人々にとっては普通のことだということがわかります。ですから、これもまた内と外の決め方によって、つまり、学者もどのような立場に立って歴史学を行うかによって見方が全然違うと思います。つまり、宗派のトップに立って、その基準に基づいて研究を行うことによって異端者と定義された人たちはもちろん異端者として現れてくるし、逆に異端者の立場に立つとまた違う見方になるわけです。

【司会】次元が違う言葉ですね。つまり、連続、非連続というのは、研究者の側がいわば frame of reference から判断していくこと。正当、異端というのは当事者側の価値判断にたった言葉なので、異端かどうかは、正当とされた側、勝ち残った側が、そうでない者を異端としていくという構造ですから次元が違う言葉です。

ただ、恐らく質問が出た背景には、研究者が連続、非連続というような区切りを、例えば非連続だというときに、当事者たちが「あれは異端だ」とかいうような作業をどれだけ取り込むか、重視するかというところで係わってくると思います。

【ランベッリ】そうですね。連続をつくるために異端者を排除しなければならないということになってしまうおそれがあるかと思います。

【プロトンス】私は反対します。あくまでも正当性をつくり出すとしたら、異端というものが絶対に必要で、お互いに相互関係もあります。異端視されたもの、例えば、ヨーロッパだったらユダヤ系とかイスラム系とか。そういう人々は結局、王家に対しての立場は非常に複雑で、単に異端とはいえない……。

【ランベッリ】正当性をつくるためではなくて、連続性をつくるために異端者を排除しなければいけないと言ったわけです。

【司会】これは面白い問題なのですが、もう一人手が上がっていたので、そちらに。

【千々和到 (国学院大学)】私は日本史を専攻していますが、2日間全部お話をお聞きしました。とてもおもしろかったです。おもしろいというよりもありがたい時間を持たせていただきました。ありがとうございました。

私の勉強の立場からいいますと、この立場でリンクして発言するというのは本当に難しいという感じを持ちながらいま手を挙げました。もちろん、私の不勉強な資質によりますが、どうもそれだけではない。非常に個人的な問題になりますが、私は国学院大学に10年前に参りました。来る前には国学院を外から見ていて、恐らく、国学院大学の史学科に神道史研究を専攻する人、あるいは大学院生がいるだろうと思っていましたが、一人もいませんでした。神道史研究の伝統は、少なくとも国学院大学にここ10年とか20年はないと考えます。

そこで、私が日本史を専攻する立場でこの2日間のお話を理解し、どうやって理解するかを考えてきましたが、私の立場で考えるとしたら、やはり神道史ではなくて神社史だったのだろうという気がしました。それが、私にとっては非常に大きな収穫だったと思います。神社史ということで神道の連続と非連続を考えるとすると、井上さんが昨日、冒頭のところで神社は動かないという話に簡単に触れました。そして、プロトンスさんが熊野を信仰と地理との関係でずっと修行の場としてあったという話をされた。それから、ランベッリさんが場所との関わりで葛城などのいくつかの社名を挙げられたと思います。

この点についてわたしは賛同したいというか同意したいなと思います。あるいは、連続と非連続を問うときに、神道、あるいは神社の連続を問うときに、そこがひとつのポイントではないか。当たり前のことですが、そう感じました。例えば熊野にしても、要するに社地、場というものだと思います。これは、ある意味では当たり前のことだろうと思いますが、ずっと神道とか仏教が生まれる前から、そこが霊地としてあるというのが神道、あるいは神社の立場だと思うし、そこが信仰の対象だと思います。



それに対してという言い方をすると批判されますが、とても粗っぽく言えば、例えば、一番たくさんの方の信者がいるのは浄土真宗ですが、浄土真宗のお寺というのは人がいるところを求めて移って行きます。移って行って、同じ寺名で、本願寺もそうですが、あちこちに移って行く。これがある意味でひとつの当たり前のことだと思います。

そのような話をしていると思いつくのは、10世紀の浄土教の始祖と言われる恵心僧都源信が、二十五三昧起請というのを書きます。その中で、墓所を定めるという掟書きを書くのですが、そこで、土公神、地の神に土地をもらうわけですね。もらって、いろいろな所作、作法をして、そこからその土地を得て自分たちの墓所としていく。こういうふうにと考えると、これは空海の高野山を建てて、鎮守に明神をおくということ、これとある意味で同じことが仏教がその場を自分の聖地にしていくという手続きが存在した。

そうすると、霊地というのはもともとあった。それが連続してあるというのが神社の立場だし、神道の立場だし、霊地はつくっていく、聖なる地にしていくというのが仏教の立場です。極めて粗っぽいですね、そういうふうにと考えることもできるかもしれないと思いますが、お聞きしていました。

それから、ちょっと変わるかもしれませんが、エバーソール先生のマイクロヒストリーというお話もとても感銘を受けましたし、自分の立場からして大賛成です。井上さんは神道の連続と非連続とはちょっとずれるとおっしゃったわけですが、そうではなくて、多分エバーソール先生はマイクロヒストリーから見た場合の連続、非連続を問題として提起すべきであるということだったと思います。昨日のプロトンス先生に対する質問でも、熊野比丘尼はどうですかという質問がありました。熊野比丘尼が配って歩くのは熊野の牛玉宝印なのですが、牛玉宝印とか護符とかを受容した側がどう受け止めたかという視点が欠けていることをエバーソール先生は、「人間が神道史に出て来ない」という言い方でおっしゃったのだと思うので私は聞いていました。これは意見として言いたかったのですが、要するに、神社資料論というのがマイクロヒストリーをやり、神道の連続、神社の連続ということを書いていくときには必要であらう。神社資料論というのがいまの日本史の中ではまだ確立をしていない。これを確立させることがマイクロヒストリーということにつながるだろうと思います。

その立場からの宣伝ですが、その立場から 12 月 5 日に国際シンポジウム「護符・牛玉宝印研究の現状と課題ー日本のおふだ文化ー」という形のシンポジウムをこの場でいたしますので、ご参加いただける方がいらっしゃるといいと思います。

【司会】時間が 20 分超過いたしました。シンポジウムはもう少しやりたいなというぐらいで終わるのがいいと言われているので、まだ手があちこちで挙がりそうな雰囲気ではありますが、そろそろ終わりにしたいと思います。

冒頭にも申しましたが、このテーマは非常に大きいものであります。議論を広げるためにやや抽象的な題を掲げましたが、本日の議論をさまざまな形に引き継ぎ、課題となったようなことを検討していきたいと思っています。次年度も研究会やシンポジウムが予定されております。わざわざ国外から来ていただいた方々には、もう少し語っていただきたいという気

もしますし、ご本人もまだしゃべりたいこともあるかもしれません。それは、それぞれの胸に持ち帰っていただき、さらにまた議論をする機会を今後もちたいと思います。今日の議論がそれぞれの国における研究に一石を投じればと思いますし、日本国内の研究においても、こうした外から見た神道というもののイメージがどういうふうに現在展開しているかを吸収して、神道研究をさらに進められればと思います。

2日間にわたり、長時間の議論を熱心に行なっていただき、皆さんに感謝いたします。ありがとうございました。これにて、終了したいと思います。(拍手)

21 世紀COEプログラム

21st Century Center of Excellence Program

神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成

Establishment of a National Learning Institute for the Dissemination
of Research on Shinto and Japanese Culture

神道・日本文化研究国際シンポジウム (第3回)

神道の連続と非連続

平成17(2005)年2月21日発行

編集発行者 國學院大學 21 世紀COEプログラム

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 國學院大學

印刷製本 株式会社 美術センター